

新刊



五十六

庫	文	門	内
二	八	二	箱
一	一	〇	書
二	〇	〇	
〇	〇	〇	
〇	〇	〇	

内閣文庫	
番號	和 28420
冊數	100 (56)
函號	211 300





明治十二年 購求

塩尻卷之五十六 正徳



程伊川曰古時公侯夫

漢董賢倖幸の事

日光名簿記少林名簿志

家のさくら池は愛知の池

晋咸和年制天郊

増上寺法華寺大勅願号

南原山宗のふちり事

老多を教まじり事

と世学校の政をいふ

宗道民窮一



元首のゆゑくた

日光山善徳の詩韓休如

大光禪院の多梅

流生十人の月急初

と仙鬼那重化を信して

吳那道意盛ん事

道書の名

太上老君

受法飲食

堂上極口



朝鮮國事記

孟華多の修物荷多葉用

かりもを

液唐之神

山椒の多を多し事也

士鴨士亀山蛤

秋炮中より一の穢治

玉多葉片のうこ

落花の多葉片

熱田の法布地

夷子額をし治

玉馬盛久

永銀佛沙の六字名号

四字經

茂家寺何人の方

后妃夫人

温純

六片人矢

花乃遺懐

辰龍系極秘秘の祝詞

乙未春世中石敷

冥系と市討し事

神系肉を供す方各

辻系

祇園法楽の方

忌火の同子者方各

牛乳を多し極秘事有

○程伊川曰古の時公に大夫よりして位各其徳に
ひ力を授けずして是も小民を養ふを好む農工商
賈を其事に任ずるおのづから各得ありあふ
上下皆ありしもの志ありて天下の公たりき後世に及
んで庶士より公に小民を養ふ日々小民を養ふ志に農
工商賈より多く富後志に位兆の公志を以て
利を争ひて四方紛紛あり是を以て今夫を
て天下よりむきや私道なるものを欲するも難
しき世のすこし禮法不備政刑かゝるるに欲を
恣にして度を越す小民を居せりて天下に若くは
生を悦んし倫を欲する学者としてても其意未だ

一旦高きせしれ肉外をかしふるも此和漢古今
亦多し彼少許の和士国々々々許ふ小長福一
毎よ左右に侍し言辭容止法の歌を宛め
君臣の勢をいへり考へるを玩し久く
紀綱廢亡をいへり歴代の史書を終る時ゆゑ
くは倭幸のそと終るをいへり昔たけしこころを
史も終るふそ方幾百年も當に子孫亦多しん
畏を子孫に流ししを誰う是を記すらん
誰う是をいへりやむき時ゆ

○ 野州日光山八景詩集 正徳路元の秋
西織の作り

小倉春曉 鉢石炊烟 含渚驟雨

寂光瀑布 大谷秋月 鳴虫紅風

山菅夕照 黒髪晴雪

第一孝暁の詩

准三宮一品大王 日光貫首
公并親王 御作 他畧之

小倉山色似皇州 不燠不夷浴水流

花氣氤氳天未曙 紅霞一片入双眸

新撰製述官李碩 号東野
奉和

名山磅礴鎮雄州 栄翠玲瓏曙色流

海底陽島猶未翳 湛空星影溢吟眸

凡八系子各一詩あり大王を侍の侍位及び韓使 趙春
泣木

西織大御序ハ矣田波長門也好古ませり大王の

古花の梅ちりもはななく世乃をの如きも今一入
またもや

曙よちりやかたは花の雪

○晋成帝咸和八年制天郊則五帝之佐日月五星
二十八宿文昌北斗三台司命軒轅奎太一天一
太微釣陳兩師雷電司空風伯老人凡六十二神
從礼

秦氏漢人祚仙の術を乞ふに悉祀禱祠多かりし
事歴代の史ありて

○天仙鬼神及び變化術の宣揚を信して徒よ一世
の富貴壽樂を祈禱する人あり嗚呼拙くも然る

夕電の奔風驚る氷の乃をく一海を虚花の葉
あつても終に楚姜の簾櫳を後きはくは寝寐
被の術も依りても誰の妻孥老病を免る事や
既の竅志をく白くして既小ハ獄の域小隣也
老の波をきりふきて漸く二河の煖小せり
頃くハ浮世の希聖を捨て石曼卿の老歩を求む
於一きハ陽九百六の災禍を離れく快く二轉の
福歩を歩くは是他小ありは只此くは口業
教稱ハ字の大慈力ありは浄土西保三教四軸大
乘金典凡そ七百六十六偈二万四千五百文字十徳福
○或四指上等流卷慈昌上人の存應と号は成

人子勅号たりしや何曰く勅号なり普光親智
國師の秘を御下授すり小徳勅書曰
勅法弁取捨用貴臨機時有循環心存忘物明珠
不避濁水大聖寧守二隅慈昌和淨社英雄教門
碩匠智弁深起如收万水之朝才徳斗明似受衆
星之拱引撰十惡之妄性滴度三界之迷灵親對
龍顏黼座奏安心之秘要益重我字之布褶舉達
者之美譽肆加褒章新深震翰特賜普光親智國
師之号

慶長十五年七月十九日

是後陽成天皇の勅賜なり此中心存忘物の文字を

云て自号とせし行ふや師也 東照大神君乃
高沙尚時道社の高師也元禄六年六月二日
梓世の偈を弄して曰佛は法樹心臥塵未落一白
但稱仙と号を不け端有念凡て佛名は唱し
化と世壽八十法鑑六十有六と云

○ 是部道玄盛人のして在証多く道士ありて何れ
を道をもつといふとを説くも多端清淨一説棟菴
一説梅菴一説符録經典科教一説在在なりや
馬場信房の經籍故ふんたり

道家才一祖は道元大沙なり是漢の張道陵也
永享元年九月九日昇天

○ 叢書を按ずるは道家の南宗少宗の分あり。東
 華少陽君 — 鍾離權 — 呂山呂 南宋人

劉海蟾操 — 張紫陽伯端 — 石翠玄恭

薛紫賢道光 — 陳泥丸楠 — 白海瓊玉蟾

彭鶴林耜

北宗祖 王重陽嘉 — 馬端陽鉉 — 譚長真處端 下畧

妾孫不二

王重陽之教曰金真

○ 道書の巻多し佛經も等し

併し其經ありて其の書ありしあり

洞真部六百二十卷 — 洞元部一千二十卷

洞神部一百七十二卷 — 太真部一千四百七卷

太平部一百九十二卷 — 太清部五百七十九卷

正一部三百七十九卷

凡四百三百九十五卷 新録

以上是を合して宝文類聚と名し之を宋の符祥
 年中張君房の所集の道書凡そ四千五百七十九卷
 其後増して五千三百七十九卷なりと云々

張君房其精要を攝して雲笈七籤一百二十卷と

遺言たり空僧が獨り此ありんや四座たり
倉あり徳は口好の徳を汝も人か自恃て教へ
ゆるかきふすしんは

○ 兼多民新し据控して自資隘強ふ面を作跡
を溝壑ふ沈むる秋後百人と去るふふ京沙難波
花柳の春去年少威を以梨園の妙ひ着時増
まると一社人より来ふと故府下の如き郡
民藝教給きして潔後して戸を出る門控
歩むるのまじく似協草のたつ目も然りき多し
子戲子の場隈隈の並ん若給負し或は無管控
嬉活する教あり或は存教給賀翻たる侍

あり凡そ取珍陽駭驛とて相疊せり
強を強めて治容を奉とて身梁に能く時中直
しつり道渴ふとやある士庶の三兵卒業
を務めしめて却て勢利ふ奔競に存ふ四座を
凡そ自あつりたる男は位一怒後とて他の徳
を省くも能くやとやと進退無後をふる人
繼偶して此位すれえ一歩皆是るふふ不樂去
古今の人情たつはねた今年存ふ能く東西ふ
窮迫の徳こつ山も安か一ふも凡そ類連して若
はるべき赤松なる孝才街ふ満たるも土芥の
こつ凡そあつり心分事とてあまなりまははる

カハハ美空の若居伯の黄泥をまゝ居の肉を要す
一皇億那日任用よきかハ適意ありけり
毎小巧言の飲慰をいりありてかりも人間乃
愛故をいりまを諱之は特飛き運蹇て民人
迄居すれも君臣の如何の嫌西がて食すもの
ありや方丈の華指口をして甘かき細糖
の糖彼方をして暖くしむるをんれ誰の
菜色の糖煎鶴形の患身を見ん鳴海哀か
筑猫此日困厄の極小いしを街に依して死を
待事誰の仁かありんやしくも人我の私
隔りもまを軒旋鞭の思ひなきことうとてんれ凡

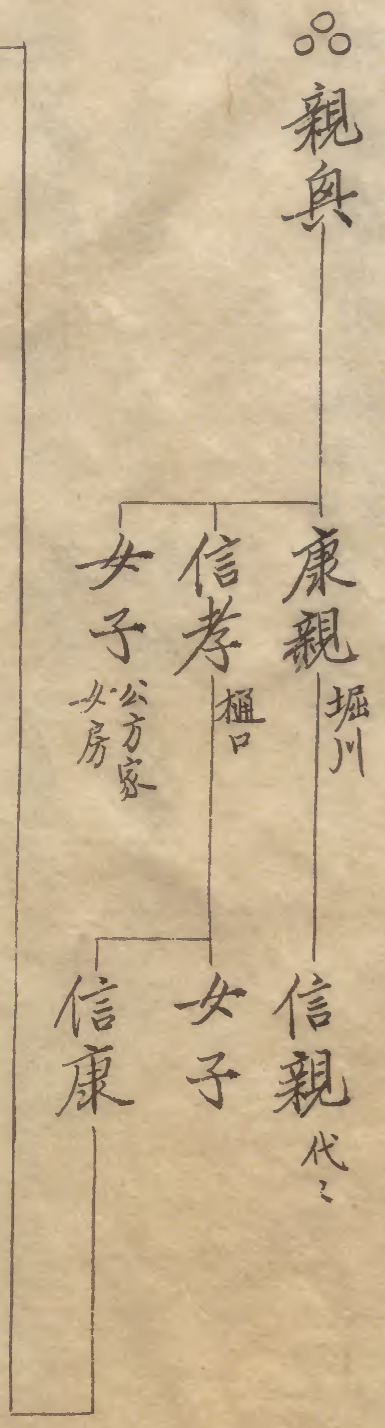
そん、白骨より肉を生ずる鶴生の淫動本マなりこ
か、めたし脱急の言まてやありき自カ月自カの魄
送すハ優渥をばし、他の経済ハ必ハ此性
愧ありし我も人も因ハにもある香世のすこ
こそ也ハ、まをすしてかり時無益の遊楽ハ、
費ハ供託ホ本マて人の愁を去るんも、
必創愈の患者をゆる贈證をかり此侍ハ
能ハ格とてゆりかをふすりまありき

自評して曰、饑年の時一村ハ、
安んずるまを精をすして、
昔小慈を慈く自快活のう、
然る

のこしきと多分富家お中し〜す〜く高松の老
 多し止を遊陟凭眺の地け共貴位の家
 有まは風を〜〜格小お〜い〜法戲もは是を
 意歎の思をもいすれ作らぬ

○或問堂上極口お根中言家お中し〜あるは
 無源お中し〜如何曰ある説法授あり天文の法水
 堂中納言云親氏 実ハ西三条左府 公條云の息なり 子なる〜
 倉中納言永相の子を〜
 親息是を〜親氏を福高西刻の智夫〜
 子の後実子出生 後二位中納言氏成是なり町尾 有を
 以〜水無源家のお中し〜家の妻子を〜親息

を慶き〜或は毒殺せん〜親息お中し〜
 彼お中し〜東照宮を〜お中し〜
 伏乃〜東照宮を〜お中し〜
 條山城お中し〜親息の妻を〜
 生は 東照宮施奏あり〜
 信孝也 康の字ハ 康康云 此詩の字を初り



康熙

基康

三五位下

康滿

中條伊豆守

○朝鮮國事

雜林唱和集中
等語を抄す

散官 無実職而受祿者を云

我國揚名の救遥授の在り

影官 終告身而無付職之規云々

諺文世宗王與申叔舟鄭麟趾等別清濁高低之

奇叙為一家言云々

雪綿 蚕細繅者ト云

南靈草 たむご

糙米

鑿之不甚精也云々
亦倭中白米也

松魚 鮭魚也我國所謂さけ
のうを也

田米 粟米也云々
とらなり

大坂城以上水路三千一百八十里

江戸城以上陸路一千三十八里

こは瀧湖の持扇山等云々

賜柑試士

朝鮮の州より毎年柑を乞む王乞を諸儒

少く頒く箴銘頌賦を乞むを魁一乞

及第せしむる也云々

青丘

朝鮮の吳名を乞ふ是禹貢の青丘といふなり

廻庭樂

我國人関ふは樂を素懸島等所乞也云々

東郭の差は新羅の樂と云ふ

東郭云素蓋鳥尊之說皆在新羅之世世久遠而無徵不可考矣云云

亦亦漢傳を引く百濟の王仁日本より書事をし

朝鮮三百六十州皆有太守云云

牧夫 府夫 郡守 縣令

次亦如此と云ふ三子而解之或六年而解之云

是皆小方の守牧と云ふ五州と名存とも或國大郡乃縣と云ふ

全濟

生濟して墨を製するは是を和して墨と云ふ
漆と云ふ

孔廟神号以文宣王稱云 親莫遵中國制云云

之と云ふ三子亦一度而重廟と謂して親を禮を凡ふと云ふ

その他程多き事も略して彼國の様を記しと云ふ
孝本多敷と云ふ地風氣亦よりて同しと云ふ此
左の事は傳供未だ其時或國又學ありん軍乃と
詩章唱和等此の四者ありあり然るに我國人
彼に對して大に屈伏の腴言あり存る彼ら猶尤
をよめてて謗言を大にむすなり亦口傳しと云ふ

彼國字を以て文字此字を以て文字とす。武勇
の氣あり柔福して淫風あり。何のおろそか
りあらん併し我國文字の字義は在年「多」を
市井の人よりを医家の小字小を以て彼字向ひ
て先氣家界遊ぶるに在ふ我神州を辱む事也
この少しを唱ふ後在情む事也

○主馬盛久由井濱にて首うす事承んを以て時太
力好む。一治二年丙午六月廿八日其門中書也

○主馬公即左衛尉尉盛久主馬入道盛國也。今
孟榮盆盆の佐物と名を以て用ゆる。今
首の物語は七月十九日。後「かりり」如つ

着する。後の衣持物を解く。冠の多ふ。今
乃名を以て上りて海に在る宿寺と持まわつて伏せ
こゝろく。寺あり。今あり。是を以て其の意也
中「其」の字を以て其の意也。其の佛も

略中法からあはれ世に中書より有り。其の意也

○法東禪外寺ふ永親律師の筆より。六字の名
号あり。在年「多」首を以て其の意也。其の佛
くふ。ほり。其の字体は「多」も九あり。其の佛
の字ふ。阿の字あり。其の意也。是佛
作の花押は真言傳ふ。永親と法親大僧也

子少くして伝へる言を先とあるは阿の字を用
ひし水もむ也

或人云禰好古は院号を無量壽院といふは
古き事にもたゞりやと云宣秀の山家集

小禰好古を奉信あり

○香瓜の末小たりて書を尾州の佐かりといふ
先よ奉本集のころをいひて奉せしり亦馬内侍
家集よ

五務保く暗しうをいふ所生野の

あふかりもむのころをいふ

あふかりのころもかりといふころをいふ

○四字經古明の漢沖蕭良有著は四言はくは故事
をいふ旁訓を以て初學に依りて書也
正徳乙未和板重刻あり

○波唐を祢の像好字とある長親の西聖にはある
明徳の比山博國依りて奉光院の幽好哉尉
盛彼の祢容を羨りて亦應水え年忠菴と云
俗天神無準とありて法姿とて照好小
おろし時好長傳奇を記しり香家載たり

祢よ夫は法をかりて傳へり

この川の名好くは年のこと法也

香家集我々のをかりて奉りて

らふ山野のかけうらふらん

然れども恋水の流るる世に流布をくも男民を憂ふ
東乃流も渡唐を神の事あり

○普光院將軍殿系何丈と系をわたりて

はふとくも幸能安き事て河能はる
事をもくもぬ砂能をわたりて

法区

何とて風をわたりてふとくもわたりて

あまの心をよみ及秋のゆかり

高河流院依を後龜山院の皇子系沙十意
の異親たりし永享十二年七月二日西院の七寺記

またくも南院系國もたは

○少休の名交けし書を能辨信正と丸を系をくも
ほくもくも色解と

偏てなき人の欠くもゆかりや

ちよもあふるもくもあふるも

此におかしく

社とくもあふるもくもあふるも

花よのすれぬ古道の

○后ハ天子妃夫人ハ諸侯室孺人ハ大夫室婦人ハ士
室妻ハ庶人配

中へも我亡母の謚号と孺人と事奉借小

あつた文會等誌より釋あるべきは、家後小女
子を系圖するに甚毒と詠するに、温紙より一
毒と云、庶人の妻をいふ凡の妻室と云て可なり

○ 士驥 アマカニ

士黽 キカニ

山蛤 山井の蛤

○ 成人云温紙の温固して小毒粉のものを煮
るも此の本名温紙と云温紙と、二細く切て老を
考ふ、和紙の製して素麵たりと云、於てさらり
唐去りも老をうんを、老唐の古語、湯餅並
温紙と作し、をんく知る

○ 袂炔トキ、人既小死、近きを牛の尾を列、
尾有るも、老を牛の尾肉、温紙の味、温紙は

魁キ、元史に記し、朱邦の人、誠く、蘇あふ
事、心こり

○ 六号 五号 孤号 夾号 庚号 唐号 大号

八矢 柱矢 繫矢 殺矢 鏃矢 縋矢 芳矢 恒矢 庫矢

彫号 彫矢、赤く、ぬり、彫号、彫矢、彫号、
建めりの号也、皆形子也

○ 玉蕊集 十六雜、片々、一字類を従三位、為り、あり

あつた、たの、か、ゆ、く、群、色、の、ま、ま、
云、ゆ、や、ま、ゆ、ま、未、ま、り、り、見、ゆ

つ字類を詠する、か、く、こ、ま、有、り、人、を、い、ん、
し、り、の、ま、ま、あ、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、

○ 或人の蒼くして花見侍の送懐

故園鶯乱啼 遊子獨偷閒

垂柳掃芳徑 疎松隔遠山

我愁新白髮 花後舊紅顏

西月兮東水 春去去不還

○ さらし年の秋暴風まよき侍りし家の様子く
ちりくく急ぎ路をゆく侍りしあるいそぐ春
まあまけんとし秋の風こもりゆくわがくは
侍りし

あかししの秋風 まかしくもや

はまきゆく花散らゆきまをかせ

さらしこころはけふふさふさしくはなをとおのまはる

かこころおもひ侍りし

はなはのまをあらはるちりの世ふ

こころおもひ侍りしまをかせ

おもひ侍りし風ふさをまをかせありし
まをかせ侍りしまをかせ侍りし
まをかせ侍りしまをかせ侍りし
まをかせ侍りしまをかせ侍りし

こころおもひ侍りし月の

まをかせ侍りし

かこころおもひ侍りし

○ 掛^{カケマ}久^{カシコ}貴^キ 天^{アマ}照^{テラス}二^{フタ}所^{ハシラ}皇^{スミ}太^{ヲホシ}神^{カミ} 热^{イツ}田^{ツミ}五^{イツ}鏡^{ミタマ}太^{ヲホシ}御^{ミコト}神^{カミ} 利^リ

始奉ハシメテ天利テンリ石清水イハシ春日野カスカノ乃皇神ノミカミ及ハ備ウカノ倉稻魂クラノミ少彦スチヒコ
 名ナ乃ノ诸神モロカミ殊别コトワケ天道チノリ分ワケ船居フネナリ乃御神ノミカミ等ナリ仁ニ懼オソレ美ウツク白シラ
 須ス四方ヨコエ仁ニ往ユキ還カヘ流ハ馭タ次ビ乃中ノナカ仁ニ大小オホナリ目觸メフク行觸ユキ流ハ
 雜穢シラクケカレ有アリ毛止モウシ诸大神モロカミ乃元ノタマ之於ノオ仁惠ニケニ坐マ須ス冥慮ミヨロ於オ以モ
 天ツ每ツ仁ニ大直オホナキ日見ヒミ直ナホ志シ聞キ直ナホ天ツ青雲アホクモ乃ノ霽チヒシ遠山トカヤマ白シラ
 浪ナミ乃寄ノヨリ流ハ海原ウチハラ毛安モヤス久良クニヤ介ケ平ヘ久良クニヤ介ケ且ツ仁ニ久クニ仁ニ鬪タ旅ヒ
 乃灾ノサハ禍ワヒ無ナシ天志ツメフコト所念ソノオモ行ユキ间マ仁ニ去来ユキキ乃路ノチ於常盤トコトハ仁ニ護モリ
 幸サハヒタマ給タマ倍ヒ申モウ須ス事コト乃由ノヨリ於平オノヘ久良クニヤ介ケ安ヤス久良クニヤ介ケ聞キ食ケ止ト恐オソレ
 美懼ウツク毛モ白シラ須ス

是為祓忌志人系核後稷の祝詞を尾張の侍老
 者神くすてしるを志し需しを予又等をもとのまに

一佐川等しく巻く一竹竹伊勢熱田以下の
 神名ハ新の如くすまきし一需しを予

○或今云將氏在國該社の奉地法正傳を因して也
 志才也熱田の法正傳ありしハ大日ありしハ兼河或ハ
 志海亦一志才し也熱田百餘本考ヲ考ヲ考ヲ考ヲ予曰熱田の奉地
 一ノ下ノ分ぬかすしりくハ百餘抄也元元迄六月迄花王陰越社奉地國領の條
 ト小曰日前宮熱田法正傳地之所見仍唯被用流ト
 二志をものしりくハ乃るハ友家いしりくハ傳し新也
 大寺山也

○乙未の姦世社中不敷して民間の考しニ大方を
 らぬ中ニ熱田の社方たる神亦綿力志しりく

凍餒を以て人々を考ふし、こゝに中菴の神家

五人 大原宗高 粟田敏成 史国左衛門 賀守一 三好忠房

維持の志を以て、尾張氏に後次祝詞 肉菴権政 仲光

等公府に請ひて、調護のめを極さんとす有司

便邪依の事を以て、輔抄をたすしめり

三月七日より二十日、凡百二十六日 三十 全数神人

男、満二十是如し、十五是毎日恩賜

彼多敵の皮夫、東國に往く、妻子皆存之を

あり、婦、泣く、白紙、涙の、恩、被、け、し、け、た、ま、り

い、ん、と、い、つ、く、は、り、ま、し、て、操、甄、の、口、を、ふ、さ、き、す

を、夫、帰、り、て、醜、を、い、は、り、し、て、い、つ、く、は、り、ま、し、て、誰

かきこつて、侍をえり、時斗り、御承す事、に

こそ、侍、此、く、を、旅、を、実、を、し、り、く、仲、形、い、ひ、く、感、ふ

懐、す、し、て、さ、い、ひ、を、是、邪、物、し、て、仁、政、の、御、映、こ

い、く、可、者、の、事、を、い、は、り、し、て、夫、帰、り、ま、し、て、い、つ、く、は、り、ま、し、て

よく、密、す、し、し、て、資、助、を、い、は、り、し、て、家、救、を、い、ひ、く、こゝに

い、つ、く、は、り、ま、し、て、者、承、承、り、し、て、諺、り、方、の、形、を、表

を、思、ひ、く、懐、を、お、り、し、て、い、つ、く、は、り、ま、し、て、志、尤、あ、り、し、て、い、つ、く、は、り、ま、し、て

凡、そ、君、小、侍、く、奉、缺、く、の、事、を、い、は、り、し、て、毎、日、金、を、い、は、り、ま、し、て

思、ひ、あ、き、ハ、掃、き、ま、し、て、い、つ、く、は、り、ま、し、て、空、之、の、橋、小、屋、を、考、へ、

を、ま、し、り、秘、を、お、り、し、て、い、つ、く、は、り、ま、し、て、是、を、い、は、り、ま、し、て

慙、面、汗、を、い、つ、く、は、り、ま、し、て、世、の、心、狼、貪、の、い、つ、く、は、り、ま、し、て

筆一竹うたを程感ありて一徳を賦成

四壁床頭雨 行雲轉手空

獨耳足枯槁 棘路睡春風

嗚呼義婦

○ 五鳳集より夷の歌を引て訪あり序略之

為護法神祢蛭兒 居民今日祭其祠

不憑船上三郎力 我為佳人釣得詩

二水ハ洛東蓮仁寺の前なる社をとり付て二十日
爲之まゝとてのまゝハ九月廿日祭あり

○ 山姥國粟田口遊岸水より一書あり昔野系系
市涼義經ふりて水一ふりて古書より云異

本義經にふ安え之を初秋の事とてり

○ 吳邦の神系より三犧羊 豕 五鼎牛 羊 豕 魚 鹿 の儲あり是

平生の饌食丹穴禽饌也 出七卷 をもつてありあり

我國の神儀ハ獸肉を主様とて是亦左獸齋を

食ハせりをもつて也夫葷腥の臭き誰の悪なり

いそんや牛羊の血胤雜豚の肝腸豈法潔のもの

なりんや嗚呼吾を屠り我をを殺すに生きたる

鐵甲をとてあつて油血盤ふ流るる女仁人豈と

食く快く事や神饌とてい止む事と扱すて

魚肉を用ゆるも脯腊の糖を佐せハ可なり眼中

も生物を剝用せんハ在りて事ハさ日也鶴肉此

是少縁をくんとを情て一塵の縁をうけ
肉を戒て一事のを生せ此形も受人欲の如ふ
あつた神の必感應ありん悉地何とぞ
や行ふよ万測の神体をもく人間無俗の如き
庸流の如くして其下の事もや神は謙
のよきよつとく教をう謙敬感交の理を徹也何
と利祿を貪りて人の業をいひて其縁ありんや
こよひ或人忘れぬる同俗の如き了ん

○明月記建仁二年四月八日の条下云系上水無瀬及此辺过祭二社
被 法前其中一方頗副田樂亦佐在土民亦每
年忌此事云々

是今云山城國山崎と王山の社也社傳も古
老云今四月八日素盞島宮始祭向と按才り延
喜式よ山城と按津境系禊神云此社亦古
と本社二有つて左を東天王山右を左神八
王子と稱する被是名此祭り也亦因り此
过祭と云山崎時此祭りも多かりしと云
是を过祭を法皇と稱し禊神を法皇と稱して
事神とて我尾府下の市井过祭津島天王の
神符たある一燃燈して祀るも古一过祭乃
遺傳りし是也

○日本記畧天延二年条下六月十五日公家自今年被在走

馬并勅樂東遊法幣亦感那院是外去々年
秋依雅雅法惱有此法形と改費之

古一より中院をまゝ雅雅平儀を新しむる
竟考の集り祇園法樂

神の中も此神のま代をそおすふ
のこもいふのまもきしし

祇園の社をま蓋島等より存和守もかく漢作



